

Computer Report

Vol. 59 No. 1 1月号 (通巻 772号)

謹賀新年

■「日本の決断」として注目されたのが、昨年暮れの国際捕鯨委員会（IWC）からの脱退である。鯨肉は日本の伝統的な食文化である。欧米人の牛／豚の食肉、蒙古モンゴル人の羊肉の食肉、エスキモー人のアザラシ肉の食肉文化と同じである。人間のあくなき食肉欲望に対応するために牛、豚、羊、鳥類の畜産がされている。鯨はそうはいかない。そこで食糧資源確保の観点から組織されたのが IWC だった。日本の主張通りである。

■そもそも食糧資源確保のための会議／委員会は、人類が生き抜いていくための組織体である（はずだ）。アメリカ大陸のバッファロー、アフリカ大陸での象のほか、ライオン／トラ／サイなどの絶滅危惧問題へのアンチテーゼだ。欧米人による乱獲／狩猟の行き過ぎも根源的背景にある。日本開国を迫ったペリー提督の黒船来訪も、直接的目的は、米国捕鯨船団の水の補給拠点確保だった。鯨もバッファロー乱獲の延長線上にあったのだ。

■食糧資源の少ない北欧諸国や日本が、近代化する捕鯨技術を背景にして臨んだ場合、欧米先進国の轍を踏んでしまうことを懸念、計画的な捕鯨の在り方を探ろうと設置されたのが IWC だった（はずだ）。ところが、人類の食糧問題を度外視する方向での捕鯨問題が議論されるようになった。たとえば、海に接していないモンゴル国なども IWC に加盟、捕鯨に反対している。食文化とは何かの議論／視点が完全に失われてしまっている。

■象の群れに村の畑が襲われ、農作物（食料）を失うとともに、村人の命すら危機にさらされている地域がある。そこで行われる象退治／駆除と、象牙欲しさ／遊戯の一種としての象狩りとは根本的に異なる。象駆除の結果、その肉は村人全員の 1 ヶ月の食糧にもなるという地域の食生活文化でもある。「象を食べない国が象退治に反対している」という当該地域からの抗議の声がある。まさに IWC の論議の原点である。

■自国の利益だけを最優先する米国のトランプ大統領のネオ国粹主義とも言える言動は、地球温暖化対策のための国際的枠組みである気候変動枠組条約（UNFCCC）を軸に制定された京都議定書、さらには 2015 年のパリ協定までを否定し、協定からの脱退を表明するに至っている。かなりの身勝手な姿勢が見てとれる。しかし、このほどの日本による IWC 脱退は、これまでの経緯を鑑みるに、米国の姿勢とは異なる。

■過ぎたるは及ばざるが如しとは言いつもりはないが、国際交渉／外交の場においての、行き過ぎた譲歩は慎まれるべきだ。少なくとも、寛容さもほどほどにしないと自国民に害をもたらすことがある。隣国韓国政府との戦後処理問題である。そこでは、国家間交渉とは何か、国家間合意とは何か、そして国家間の信頼とは何か完全に失われつつある。一連の戦後補償での度重なる隣国の一方的な裏切り行為は、止まることを知らない。

■こういう隣国に理性を失うほど目くじらを立てることはない。しかし今後は、凜とした毅然とした態度で臨みたい。IWC 脱退で見せた日本の基本姿勢、主張すべきは主張し、戦うべきは戦う意思表示を前面に押し出した姿勢をもって臨む 2019 年であって欲しい。行き過ぎた寛容は、自衛隊の哨戒機にレーダー照射をするまでに隣国を増長させている。もはや軍事的衝突を誘発するところまで来ている。危機感を持って臨みたい。（藤見）